

大阪府文芸懇話会と『あしかび』

寺下 誠（中之島図書館）

1. はじめに

大阪府文芸懇話会なるものが、戦後、大阪府立図書館によって大阪の文化振興に資するため創設されたことを、筆者が中之島図書館に勤務し始めてしばらくしてから知った。

筆者には、このことを江戸期より興隆盛んであった浪速の文化の名残りとも思え、かつまた当時の大阪府（行政）のいまだ残存する文化興隆への思いの一端を感じることができた。

ここにその経緯と概要を紹介するとともに、このもくろみが江戸期浪速の文人の伝統につながるのではないかと思う筆者の勝手な想いに導かれて、浪速の「知の巨人」とも称される木村兼葭堂(1)を偲びながら若干の文を綴り、紙面を塞ぐ責を果たしたい。

2. 大阪府文芸懇話会の創設と活動

大阪府文芸懇話会とは、在阪の文化人芸術人といわれる人達が一同に会し、大阪の文化の向上策を話し合い推進するという目的で昭和 25 年に誕生したもので、事務所は中之島に位置する大阪府立図書館内に置かれている。

第 1 回総会は昭和 25 年 8 月 23 日大阪府立図書館において開催され、37 名の会員の出席を見ている。当時の会員名簿を見ると、文学、美術、音楽、舞台（能・文楽・歌舞伎等の伝統芸術含む）の各界や報道各社の他に大阪府庁幹部も会員になっていて、会員数 60 名余りである。さらに府知事、府議会議長、府教育委員長が顧問となっており、官民一体といってよい相当に大掛かりなものとなっている。

創立当初の世話人は今村荒男、井上吉次郎、大塚兼紀（副知事）、大村恕三郎、大西利夫、高安六郎、永井幸次、中村祐吉（府立図書館長)(2)、鍋井克之、藤澤恒夫、安西冬衛、水川清一、菅楯彦の各氏である。

総会の経過は、まず大西利夫氏より懇話会創立の経緯を説明の後、安西冬衛氏司会のもと参会者から意見、感想が述べられ、三宅友平大阪府知事室長の挨拶で終わっている。会員の意見としては、特に今中楓溪氏から年 2 回乃至 4 回の文芸雑誌発行を望むとの発言がでていた。

総会に先立ち作成された『大阪府文芸懇話会規約』によれば、懇話会活動の目的は規約第二に記載されており、「大阪府文化政策の一環として文学芸術面の振興と発展を計り合わせて会員相互の親睦と啓発に資するを以て目的とする」とされ、そのため第三記載の「(一)大阪府文化政策に関する進言並に諮問答申、(二)芸術作品の制作促進並に選奨、(三)講演会研究会及会員懇談会の開催、(四)会報の発行」等の事業を行うこととした。また、会員は第四で「大阪府知事文芸賞、大阪府教育委員会芸術賞、大阪府知事学術文化賞中芸術部門の各受賞者及其の審査関係者」とされている。

懇話会の会員は当時の中村祐吉館長の幅広い人脈を反映して、当代一流の文化人が揃っており、作家の阿部知二、吉井勇、川田順、藤沢恒夫、音楽家の朝比奈隆、辻久子、画家の鍋井克之、菅楯彦、演劇の高安六郎、建築の村野藤吾など錚々たる顔ぶれであった。

創設のきっかけは、昭和23年4月、英国桂冠詩人エドモンド・ブランデン氏が来阪され、四天王寺での歓迎会の夜に話がでたことがようやく実を結んだよしである(3)。

また、これの運営資金としては、当初は全面的に大阪府の支援を仰いで知事室執行の補助金をあてている(4)。

第2回総会は同25年11月18日に同じ府立図書館の記念室に於いて開催され、21名の参加を見ている。

総会の経過は、まず中村祐吉館長の欧米旅行談があり、その後大西利夫氏が司会者となって、規約第三の(四)にうたっている会報の発行について議事が諮られ、年4回の雑誌発行が決定された。内容は、①文学小説評論②絵画彫刻工芸造詣美術③音楽演劇④詩短歌俳句川柳の4分野でそれぞれ4回分を分担し、第一号は投票の結果、文学小説評論と決まり、編集は安西、大西の両氏の担当となった。

雑誌の題名は、当日の参加者が一つずつ提案する投票を行ったところ、美、浪花、木花、梅、あけぼの、如実、生、金剛、創天、大都、芸術大坂、美大阪、水都芸術など出たものの結論を得ず、持ち越しとなった。そして、後日会員に対し文書で会誌発行の総会申し合わせ事項の通知と適当と思われる題名の照会を行った(5)。

その後の経過は詳らかでないものの、会誌の題名は『あしかび』と名付けられた。会誌第一集の編集後記によれば、「題名は安田青風氏の提案で世話人会が満場一致で賛成した」ことにより決定に至ったものと思われる。

文芸懇話会は創設以来、幾多の変遷があったが、その活動については、毎年、世話人会及び総会の開催がなされて懇話会の活動方針が協議、決定されている他に、懇話会、講演

会、研究会の開催等がなされている。

残念ながら、当時の書類の保存が不十分なので、断片的なものは別にして、年次を追って紹介出来ないが、中村氏は「この会が一番華やかだったのは昭和 37 年。今は亡き菅楯彦画伯他十数名の会員諸氏が、大阪府の振興のため、はるばる東京からの賓客久保田万太郎氏の応援を得て、府下 9 市・町で文芸講演会をブツ廻ったときだ」と言っている (6)。

その後、会の活動は補助金額の減少もあって、縮小していったものと思われるが、昭和 47 年 1 月 27 日に「昭和 25 年に組織せられました大阪府文芸懇話会など、今に存続しているのでありますが、様々な理由のため余り目立った活動もいたさず、ほとんど冬眠状態になっている・・・、この際、組織替えか、あるいは、更新再出発など考えてみて、しかるべきではないかと存じ」会員有志が参集し、善後策を講じるため懇談会を開いている(7)。

しかし、その甲斐もなく、ついに懇話会は 46 年度を最後に終息したようである(8)。

思うに、大阪府文芸懇話会とは、戦後の一時期、図書館の外に然したる文化・教育施設のない時代の大阪で、行政能力と社交性を備えた稀有な文化人図書館長の強力なリーダーシップのもと、大阪の文化・芸術人を結集して一大サロンのようなものを作ろうとした営みであったのではないか。したがって、日本の復興が進み、文化施設も各地に出来ていき、様々な文化・芸術のチャンネルが飛躍的に増加していった状況下では、自ずと消え去るのもやむを得ないことであつたらう。また、中村館長が昭和 41 年に引退したことも大きな原因と思われる。

3. 会誌『あしかび』について

上述のように『あしかび』と名付けられた会誌の体裁等については、懇話会第 2 回総会において、司会者の大西利夫氏より「小さなもので豪華なもの、雑誌でない雑誌にしたい」と説明されている。

第一集の編集後記によると、「“あしかび” は売らんがための雑誌ではない。而も季刊である。ただよんであとを棄ててしまうやうなものを作りたくない。通俗的には面白かろうが面白くなからうが、とに角読んだあとでのこしておけるものを作れといふ」世話人会の注文に編集委員は苦勞したようである。

第一集は昭和 26 年 4 月に発行された。表紙は菅楯彦氏の『浪華百景』で、飄々、駘蕩とした味わいがあり、装丁もセンスが良い。40 頁の小冊子であるが、国文学者の澤瀉久孝、野間光辰、森修、石濱純太郎、詩人は安西冬衛、小野十三郎、歌人は吉井勇、安田章生、

安田青風、今中楓溪等の各氏が寄稿しており、読み応えのあるものとなっている。また、懇話会創設に縁のある前述のエドモンド・ブランデン氏から雑誌創刊を祝す言葉を記した中村祐吉宛の手紙も載せている。

なお、巻末に赤間府知事と中村館長の対談が掲載されているが、その内容たるや旧知の友人のごとく遠慮のない洒脱なもので、中村氏の当時の大阪府庁における立場を想像するに難くない。

第二集は昭和 27 年 3 月に発行され、予定通り美術関係となっているが、第一集発行後 1 年経過しており、年 4 回体制が早や崩れることになった。

表紙は矢野橋村氏の『梅』で、雅で品のある画であるが、本号では表紙のあとに鍋井克之氏の『海』(オフセット)を挟み込んでいる。

第一集と同様 40 頁であるが、寄稿者は画家等美術関係者ということもあって、座談、対談を多用しており、日本画の須磨對水、菅楯彦、矢野知道人(橋村)氏の「北水夜話」、洋画の鍋井克之、吉原治良、奥山堤氏の「南日放談」、赤松麟作、池田遊子両氏による「西廂漫語」等、芸術家として世に出るまでの苦労話など興味深い。

美術特集なので当然、会員の作品などの図版が多く挿入され、ビジュアルなものとなっている。

次に第三集はとなるが、公式には発行されたことにはなっているものの、第一集、第二集のような雑誌ではなく、懇話会として府立図書館所蔵の本邦唯一の稀覯書、西鶴『好色盛衰記』を昭和 28 年 6 月に翻刻刊行し、それをもって第三集としたのである(9)。その後、会誌の発行はなされていない。

ところで、『あしかび』第一集の編集後記に「“あしかび”は葦芽である。葦は浪華を象徴し芽は成長を意味する。よき名である。」と自讃しているが、小学館日本国語大辞典によれば、「あしかび」とは葦の若芽、若い葦、あしづの、あしわか。古く古事記にも「葦牙(あしかび)の如く萌え騰る物に因りて成れる神の名は・・・」と記されている。

春になれば水辺の葦が芽吹き、水面にそのとがった新芽が点々と顔を出す、そのような情景が思い浮かぶであろうか。

葦は昔から難波江[瀧]のものが名高く、和歌にもよく詠まれており、新古今集に「難波瀧短き葦のふしのまも逢はでこのよを過ぐしてよとや<伊勢>」「夕月夜潮満ちくらし難波江の葦の若葉にこゆる白波<藤原秀能>」、千載集に「難波江のあしの仮寝の一夜ゆゑ身をつくしてや恋ひわたるべき<皇嘉門院別当>」がある。

難波潟は、大阪湾の入り江、淀川河口で、ひろびろとした水面を埋め尽くすかのように葦が生い茂り、古くから、葦といえば浪華を連想する浪華の名産であったようである。

また、「あしかび」といえば、中之島図書館が所蔵する貴重書『兼葭堂贈編』(10)中の上田秋成の『あしかびのこと葉』が想起される。その草案で秋成自筆のものが、これも中之島図書館所蔵貴重書である『阿志乃也能記二翁原本』(11)に収められている。

『あしかびのこと葉』は、近世大阪（明和より寛政に至る）の文運興隆を象徴する存在の木村兼葭堂がその書堂に題する詩文を諸家に求めて集成したものの中の一つであり、「このころ適々いとまある日、木村ぬしがあしの屋を訪いきしに、あるじまめだちて、茶くだ物なんとすすめらる、いともきよらなりや」と始まり、秋成が主人から聞き取った自伝的内容を流麗な擬古文に表し、人となりとその学問、知識を詳らかに伝える貴重な文である。

4. 木村兼葭堂のことども

木村兼葭堂は、1736年（元文元年）生まれ、通称を坪井屋吉右衛門といい、父の代から大坂の北堀江北詰（大阪市西区）で造り酒屋を営む町人であった。酒造業のかたわら、本草家、博物学者、古今東西の文物蒐集家、蔵書家として、また詩文、書画、煎茶などをたしなむ博学多才の人として大坂のみならず諸国に知られていた。その居宅の書室は兼葭堂と名付けられ、来訪する者は全国各地から兼葭堂の膨大なコレクションの閲覧と情報交換を求めて引きも切らず、交友関係の広さは上は大名から庶民に及び、またその名は海外にも響いていた。

ある時、北堀江の邸内に井戸を掘ったところ、たまたま葦の古根が現れ、古の浪華の名物と喜んで、早速書室に兼葭堂の扁額を掛け、堂号としたという。

結婚の仲人もした9歳年長の親友、細合半齋の『堂記』(12)は、兼葭堂命名の経緯をはじめ書堂の経営、堂主の日々のふるまいなど詳しく述べているが、名の由来として、井戸を掘って葦根が出現したことのほかに『詩経』の秦風兼葭の篇と『万葉集』の難波の芦の歌もあげている。

水田紀久氏は、長年の兼葭堂研究の成果を一本にまとめて上梓された『水の中央に在り木村兼葭堂研究』の中で、「その命名はこのような偶然の即興即時にのみ由来するのではない。それは『毛詩』秦風の兼葭にまでさかのぼる。…先哲古人を思い懐う心、「兼葭秋水の情」に通じさせたにちがいない。…まことに兼葭堂とは、主人のつつまじやかな心を寓した室名である。」と述べている(13)。

そこで、兼葭堂の堂銘の謂れや主人の人となりを偲ぶため、『詩経』秦風兼葭の篇を紹介したいと思うが、上述の水田氏の研究書中巻頭の序に載せられている氏の香り立つような名訳を是非、以下に紹介させていただきたい。

兼 葭 蒼 蒼	白 露 為 霜	所 謂 伊 人	在 水 一 方	邈 洄 從 之	道 阻 且 長	邈 遊 從 之	宛 在 水 中 央
よ し あ し の	し ら つ ゆ は	わ が つ ね に	は る か か の	ゆ く か は に	は ば ま れ つ	ゆ く か は に	さ な が ら に
ふ か き し げ り よ	し も と む す べ り	お も へ る ひ と は	き し の あ な た に	さ か ら ひ と め ば	い た り も か た し	し た が ひ と め ば	み づ の ま な か に

全部で3章あり、各章わずかに語を変え、韻を換えて、リフレインしていく形式であるが、上記はその第一である。心ゆさぶられるような思いがする。

目加田誠博士は「何か神韻縹渺たるものがあり、むしろ水中の神をすらほうふつさせる。恐らく後世の詩とても、かほどに清くうるわしいものはまれであろう。」と述べている(14)。

木村兼葭堂に関して、中之島図書館はまだ貴重書を所蔵している。それは、大田南畝（蜀山人）が銅座役人として一ヵ年の在阪中、業務の余暇にしばしば晩年の兼葭堂を訪問し、南畝が質問し、兼葭堂がそれに答えるという問答録『邈遊從之』(15)であって、兼葭堂の百科全書的博物学者ぶりを如実に示したものとなっている。

ところで、兼葭堂の状況はといえば、上掲の水田氏著によれば「遠近よりの来訪者はひ

きも切らず、町内付合いや商用だけでも結構忙しいのに堂の内は儒家、医家、僧侶をはじめ詩人・書家・画家・印人から天文家・地理学者・博物家・本草家・蘭学者にいたる学芸万般の人士で、連日千客万来の賑わいよう。」、また「その文庫が、実のところ当代文化人たちの半ば公共図書館であり、かたがたサロンの役をも果たしていたのは当然のこと。」という有様であった(16)。

中村真一郎氏が文学者の自由闊達な目でヴィヴィッドに木村兼葭堂とその周辺の人びとを描いた、その著『木村兼葭堂のサロン』の中で兼葭堂を評して、「その長い道筋を振り返ってみた時に、一度、分解してみせた彼の多様性の核をなすものは、やはり「サロン人」としての存在であるように見えてきた。」「そして、十八世紀後半の大坂ブルジョワジーの成熟も、彼を「サロン人」として生きさせるのに、最適の時代であり、地域であったと思う。」また、「サロン人」というのは、「自宅の客間を開放して、広く客を迎え、そこをその時代最高の知的芸術的諸問題の討論の場とし、酒食を供することで、集まった多くのエリートたち相互の親交を深め、一時代の文明の水準を急速に高める働きを行う仕事をした人物という意味である。」そして、「そのサロンの楽しい会話や、相互の蔵品の展示によって、孤立した個人では困難な高い地点まで、文明は成熟するのである。」と述べている(17)。

要するに、木村兼葭堂の世界とは、江戸中・後期の経済的繁栄を背景に、謙虚に森羅万象の知識を追い求めて、気前良く親切に当時最高の知識人、芸術家達と交遊を重ねていく、英邁で進取の気風に富んだ主人公を中心とした理想的なサロンのようなものであったろうか。

また、そのような世界は、日本近代史家の渡辺京二氏が、その著『逝きし世の面影』で江戸末期から明治初期の西洋人の見聞録をもとにして描いたような、古き日本の姿—文明の中でこそ、存在し得たのではなかろうかと思われるのである。渡辺氏は「江戸期文明ののびやかさは今日的な意味で刮目に値する。」(18) また、同氏は『江戸という幻景』の中では「江戸時代の生の空間と人びとの存在様式が近代のそれとまったく異質であり、二度と引き返せない滅び去った世界である・・・江戸文明は自然に滅びたのではない。維新以降、われわれが意識して滅ぼしたのである。」(19) と述べている。

5. おわりに

これまで、大阪府文芸懇話会のことと木村兼葭堂のことを、それらに関連する中之島図書館所蔵資料を紹介しながら述べてきた。

筆者は文芸懇話会のことを館資料（残念ながら保存不十分）を中心に調べていく内に、当時の中村祐吉館長とその周りの文化人、芸術家、学者等と間にかかなり濃密な交流があったことに興味を持った。その私的サークルのようなものが、戦後まもなくという時代背景の下、大阪府の全面的支援によって、当時大阪で知の殿堂、文化の殿堂として屹立していた府立図書館をベースに創設されたのが文芸懇話会であろう。

中村氏の人となりは典型的な戦前の知識人、文化人（またオールドリベラリストと称しても良いか）で、きわめて常識豊かで家族思い、人あたりも良く、実に幅広い交遊関係と官界に強力な人脈を持っていて、行政能力にも長けている。

そのような人物がプロモートして出来たのが文芸懇話会で、創設の目的は懇話会規約に列記されているものの、その実は中村氏を核とする大阪の文化人、芸術家のサロンを創ることのように思えた。事実、創設当初から当分の間は頻繁に世話人会、懇話会等を開催している。

当時は、まだ、いわば牧歌的ともいえる府の行政システムの中で、豊かな文化的資質を持つ一個人の想いを行政施策にとり入れることが可能であったのであろう。

ただし、そのような活動が新しい大阪の文化を振興する動きにつながっていったのかどうか評価するのは難しいだろう。

次に、筆者が木村兼葭堂のことを取り上げたのは、文芸懇話会がサロンの形成という点において相通ずるところがあると思料したからに他ならない。中村氏が意図していたのかどうか確かめるすべもないが、会誌が『あしかび』と名付けられたこと、懇話会創設の昭和25年に兼葭堂150回忌があったことなどから当然、意識はしていたものと思われる。

ともあれ、兼葭堂の昔は言うに及ばず、創設以来60年を経た現在、大阪府文芸懇話会のこと ONCE UPON A TIME IN OSAKA である。

注

- (1) 木村兼葭堂は近世大阪の町人で、博覧強記の本草学者、文人、幅広い趣味人。大阪歴史博物館編『特別展 没後200年記念 木村兼葭堂一なにわ知の巨人一』思文閣出版2003年が多数の出展資料の図録と参考資料を掲載し、その業績を網羅的に紹介している。
- (2) 中村氏は明34年3月生、三重県出身。大14東大英文科卒、姫路高等学校、新潟高等学校教授を経て昭21大阪府社会教育課長、教育委員会第二部長歴任の後、昭25年10月、第4代大阪府立図書館館長に就任。経歴その他の人となりは、中村祐吉『うらなり日記』上・下巻1982年、山代義雄「公共図書館長適性について」(『大阪府立図書館紀要第27号』1991年、3～9頁)、栗原均「故中村祐吉館長と大阪府立図書館」(『同紀要第22号』1986年、2～18頁)に詳しい。
なお、『うらなり日記』は中村氏の自分史のようなものといえようが、特に、大阪府入庁後から図書館長就任前後にかけての記事が、氏の多彩かつ活発な日々の交遊状況が窺うことが出来て興味深い。
- (3) 中村祐吉著上掲上巻、256頁
- (4) 同上、同頁に「兵站金約百万円は大塚副知事がひきうけてくれた。」と記述がある。府補助金額は残されている財務書類から年間昭38～39 15万円、昭41～44 12万円、昭45～46 10万円と判明。なお、府予算書等による調査確認をすべきと考えるが、出来ていない。
- (5) 昭25年11月24日付け通知で、内容は、会誌は年4回の発行とし、相当体裁の立派なものにすること、及び会誌編集の方針を第1回散文学、評論、随筆等 第2回絵画、彫刻、工芸等 第3回映画、演劇、舞踊等 第4回短詩形文学とすることであった。
- (6) 『なにわづ第28号』1966年8月3～4頁、なお『中之島百年—大阪府立図書館のあゆみ』2004年の巻末年表に懇話会の活動状況が散見される。
- (7) 昭47年1月11日付けで会員に開催通知をし、大阪クラブに於いて開催(会員11名出席)。
- (8) 文芸懇話会の消滅の経過等は残念ながら把握できなかった。
- (9) 『大阪府立図書館五十年史略』1953年、64～65頁、『中之島百年—大阪府立図書館のあゆみ』187頁
- (10) 諸家から贈られた兼葭堂堂記を収めた兼葭堂蔵版は種々あるが、中之島図書館所蔵のものは上田秋成のほか管甘谷、岡白駒、片山北海、加藤宇万伎、建部綾足のもので一冊に収められている。
- (11) 『あしかびのこと葉』の秋成自筆の草案のほか、『近世畸人伝』の作者伴蒿蹊の『浪速兼葭堂

主小傳并家蔵物品上進記』が合綴されているが、後者は秋成の文を踏まえた兼葭堂の略伝と没後の蔵書等の幕府への献納を記している。

- (12) 野間光辰「寄題兼葭堂詩文」(『大阪府立図書館紀要第9号』1973年3月、75～76頁)
- (13) 水田紀久『水の中央に在り 木村兼葭堂研究』岩波書店2002年、20頁
- (14) 目加田誠『詩経』講談社学術文庫1991年、39～40頁
- (15) 両者それぞれが自筆で認めた原本であるが、大阪府立図書館が複製本『大阪資料叢刊第一 遡遊従之』を1971年刊行。府立図書館の大先輩である多治比郁夫氏が巻末の解題を執筆しており、その2頁に『詩経』秦風兼葭に因む書名由来等が記述されている。また、4頁以下には、上掲『浪速兼葭堂主小傳并家蔵物品上進記』の翻刻紹介をしている。
- (16) 水田紀久著上掲41～42頁
- (17) 中村真一郎『木村兼葭堂のサロン』新潮社2000年、709～710頁
- (18) 渡辺京二『逝きし世の面影』平凡社2005年、589頁(平凡社ライブラリー版あとがき)
- (19) 渡辺京二『江戸という幻景』弦書房2004年、12～13頁